

所属・資格 ドイツ文学科・教授

申請者氏名 安達 信明

研究課題		<ul style="list-style-type: none"> ・言語類型論とその関連領域の研究 ・近現代(19世紀・20世紀)のドイツ音楽劇研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>言語学では、これまで通り言語類型論に注目して音韻論、形態論並びに統語論の各領域について考察を深めて行く。小規模言語も含めた現用言語の具体的資料に当たり、従来のアプローチの限界や問題点を更に明らかにして行く。</p> <p>音楽関係では、従来通り近過去の混迷の中で展開されたドイツ語圏の作曲家の手になるドイツ語による音楽劇を取り上げ、音楽史的偏差と作品の再評価の問題に加え、演出上の読み替えを巡る議論に取り組みつつ、これと関連する事項を資料で追いながら、併せて近現代という時代的文脈の中でその意味付けを洗い直す。</p>
	研究の結果	<p>先ず言語学関係では、日本言語学会、日本独文学、日本ケルト学会に出席し、その後言語学会の発表者が指導するAA研主催のジンポー語集中研修(3週間)に参加し、他の研究者から資料の提供を受け意見の交換を行い、その他各種文献調査・収集の他各個別研究会・報告会に出席し、類型論の可能性に関する事例を検討すると同時に、別途「使用基盤モデル」に基づく理論と類型論を重ねて検討するという研究の新たな方向性を得た。</p> <p>音楽研究関係では、恒例の日生劇場主催の「舞台フォーラム」(第26回)に参加し、また7年前からStanford大学のOpera Glass-ComposersやOperoneのデータベースを相互比較しながら、個別のデータファイルを作成する作業を進めており、併せてIMSLPなどパブリックドメインのものや、欧文・和文の著作・論文など文献資料の他などの各種データを収集してこれを拡充し、日本初演の実際の舞台公演にも複数接し、これらを並行して研究を進めている。その成果の一部を、ポスト・ワーグナーという枠における一つの方向性として、E.Reznicekの問題作『青髭騎士 Ritter Blaubart』を巡る考察を論文にまとめ、Ironieを軸にした作品解析を提示した。</p>
	研究の考察・反省	<p>父が他界し、母も高齢で実家が遠隔地の九州のため、各種関係雑務に追われる一年となった。言語学関係では、文法理論と言語類型論に加えて新たに使用基盤モデルを検討に加えたが、最も言語的直観に近い後者を理論と擦り合わせるためにはまだ問題も未消化の部分も多く、これを巡るテーマの論文化は今後の課題となった。また夏季に参加したAA研のジンポー語言語研修成果のまとめもまだ作業の途上にある。</p> <p>音楽研究関係では、ファイルの拡充・整理・修正と内容検討は一定の範囲で進捗し、これらにより従来の研究の偏差を修正する展望を得たものの、資料の他個別対象による内容の粗密や不整合性も否定できず、まだ未消化の部分も残っており、今後の検討に委ねることになった。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>(論文)</p> <p>※「カレーの市民 ―自己犠牲の憂鬱―」日本大学ドイツ文学論集第36号, pp.35-54 (2015)</p> <p>※「鳥たち ―不当に忘れられた作品―」日本大学ドイツ文学論集第37号, pp.17-46 (2016)</p> <p>※「レズニチェクの『青髭騎士』―音楽のアイロニーを巡って―」日本大学ドイツ文学論集第41号, pp. 1-28 (2020)</p>	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>(著書)</p> <p>※「ニューエクスプレス・エスペラント語増補版」(白水社)(2018・8)</p>	